

第 63 回日本チベット学会大会

11 月 14 日 [土] 四天王寺大学 (羽曳野キャンパス)

中国学における〈藏學〉について

池田 巧

京都大学人文科学研究所

*本稿は、11 月 14 日 [土] に四天王寺大学羽曳野キャンパスで行なわれた第 63 回日本チベット学会大会のワークショップ「今チベットから何を学ぶか」のパネリストとして報告した内容を文章化したものである。当日配布したハンドアウトおよび Keynote によるスライドで提示した資料を統合して増補改訂するとともに、時間の制約で意を尽くせなかった点については補筆を行なった。中国語も日本漢字音で読む読者がいることを考慮し、表記にはすべて繁体字（康熙字典体にもとづく正字）を用いたほか、中国語の書名は《 》で、中国語の用語等は〈 〉で括り、日本語の漢字表記に紛れないように工夫した。ワークショップの司会を担当された長野泰彦先生、パネリストの大川謙作先生、小長谷有紀先生、立川武蔵先生、ならびに会場あるいは終了後のロビーで率直な御意見をお寄せいただいた参加者のみなさまに御礼申し上げます。

1. 〈藏學〉の意味と位置づけ

中国語の〈藏學〉(チベット学)には〈藏傳佛教研究〉(チベット仏教研究)というイメージが付きまとう。もし名刺に〈藏學研究專家〉と書こうものなら、ほぼ確実に〈藏傳佛教〉の研究者だと思われる。そこで私は〈漢藏語方言史研究專家〉と刷っている。〈漢藏語〉という言い方は専門分野に関わるひと以外にはわかりにくいので説明を求められるのだが、〈藏學家〉と書いて黙って誤解されるよりはよほどマシである。

中国における〈藏學〉とは、〈漢學〉〈敦煌學〉〈西夏學〉などと同様、〈中國學〉を構成する一分野の位置づけである。要するに中国の〈國學〉の一部分にすぎない。しかも国際的には〈中國學〉≡〈漢學〉であり、その分野の深さと広がり人が文学的、世界的な普遍性を有するのに対して、〈中國學〉≡〈漢學〉分野の研究者からは〈藏學〉はそれに比すべき対等の学問分野とまでは認識されてはいないのが実情だ。その構造的な理由を考えてみたい。

中国語では〈中國學〉の一部としてのチベット学は〈中國藏學〉、それに対して西欧のチベット学研究は〈西方藏學〉と呼ばれる。〈日本藏學〉という言い方もあるにはあるが一般的／普遍的表現ではなく〈中國藏學〉〈西方藏學〉に倣って作られた用語で、造語的ニュアンスを免れない。したがって中には高く評価される研究が少なからず含まれてはいるものの〈日本藏學〉が総体として人文学研究に普遍的な貢献をしているようには、中国語の文脈からは捕らえることはできない。

日本語では多様な個別の「研究」の上に、分析の範囲を設定して整理した「(各/専論)」があり、そのうえに総体としての「～学」がある。「～学」と呼べるのは、伝統と学律に支えられて体系化された学問分野である。中国語ではこのうちの「論」に相当する表現と概念がなく、個別の〈研究〉と、それが体系化された〈～學〉の二分法である。(ちなみに中国語で〈～論〉というと、個別のテーマについて特定の立場から述べた意見や評論をさす。)したがってチベットを対象とする学問の呼称には〈西藏研究〉と〈藏學〉があるのみだが、中国語で〈～學〉と呼べるのは、〈漢學〉〈彝學〉〈蒙古學〉〈西夏學〉〈敦煌學〉のように、文字で記録された歴史文献による文史哲学の伝統が背後にある。この呼び方には、国外で学問領域として成立しているか否かはしばしば考慮外であることにも注意が必要だ。

2. 中国の社会概念と民族研究

多数のチベット人が〈藏族〉として暮らす中国の社会概念では、国家を形成する国民である〈中國人〉の下位区分として民族がある。中国語による考えかたでは、それで筋が通る。中国人の身分証明書には国家認定の民族を記載する欄があり、大多数の中国人を占める〈漢族〉、チベット人は〈藏族〉、それ以外にも〈回族〉〈壯族〉〈維吾爾族〉〈蒙古族〉〈羌族〉のように56の民族区分がIDの重要な認定要素となっている。

そうすると、チベット語研究は広い意味での「中国語(中国の諸言語)」研究の一分野として位置づけられ、チベット文学は中国文学の一分野だという理屈が成り立つことになる。チベット語は〈我國少数民族語言之一〉であり、チベット文学は〈我國少数民族文學之一〉である。中國社會科學院には〈文學研究所〉があり、〈民族文學專家〉がいて、著名な教授も少なくない。たとえばケサル王伝などはここに位置づけられることになる。

個人著者の特定できない伝承／口承による文学は、漢語であろうと少数民族語であろうと〈民間文學〉というジャンルに含まれる。少数民族語による民間伝承は、漢語への翻訳と紹介が重要な研究作業として位置づけられている。結果〈民間文學〉の研究・分析・討論は、ほとんど漢語で行なわれることになり、自ずと中国文学研究に組み込まれ、

人文学研究としての普遍性を獲得することになるのである。中国文学が世界文学のひとつとして普遍性を持つことは、周知の事実である。

3. 日本における中国学とチベット学

それでは日本の場合はどうか。日本では中国語中国文学の専攻分野では、あくまで漢語と漢語で書かれた文学作品が研究対象であるので、チベット語やチベット語で書かれた文学は、「中国文学」からは排除されてしまう。あたりまえだが、チベット語は中国語ではない。かくして中文に籍をおく第三世代のチベット学研究者として出発した私の修士学位論文は、青海省のチベット人が話す、変容した漢語方言の研究であった。

もし私が言語学科の所属で、言語研究の対象としてチベット語を扱うのであれば、このような問題は生じない。この状況は現在でも同じである。それゆえ日本では、チベット語研究をチベット学の研究分野の一つとして扱おうとすると[主に中国学との関係において]研究がしづらく、言語学研究の対象のひとつとして選択するのなら、研究がしやすい。言語学研究における貢献という点では、チベット語も英語もアフリカの言語もその研究価値は等価だからである。チベット語の研究は人類の言語研究において、歴史的変遷と類型構造の研究に重要なデータを提供してくれるものの、チベット学という「学問」の一翼を担うという位置づけとは、価値が異なると見ることができる。

同様に、チベット語で書かれたケサル王伝は、もちろん中国文学の作品ではなく、チベット文学の古典である。いっぽうで、漢語で創作した作品を発表した現代作家の扎西達娃は、創作の主題の大部分がチベット人とチベット社会を描くものであっても、日本においても「中国文学の作品」として扱われている。このように見て来ると、日本においてはしかし、チベット学に(中華文明に拮抗するチベット文明、漢学に対峙するチベット学として)、中国国内よりも一段階上の普遍性を最初から認めているからこそ、かかる矛盾が生じるのだ、という評価をすることができないでもない。

4. 中国における〈藏學〉の展開(1)

国外のチベット学研究との関係のなかで、中国において〈藏學〉が国学の一分野として、位置づけられて行く過程を簡単に整理しておきたい。

〈文化大革命〉の終結(1977年)から天安門事件(1989年)までは、国外との交流がかなり制限されていたこともあり、中国国内の研究者は、積極的に国外における先行研究の吸収と消化に務め、入手できた貴重な資料を広く共有すべく、代表的な研究については中国語への翻訳が盛んに行なわれた。中国の研究では、今日においてもなお、原文でなくこれらの翻訳を参照している場合も少なくない。大半は中国において著作権が

整備される以前に翻訳されたため、〈内部参考資料〉の扱いで 90 年代に入るとその役割を終えているが、一部の翻訳資料集には、国際的なチベット学の研究紹介の役割を担うものとして、今日も継続して公開刊行されているものがある¹。

《民族語文研究情報資料集》第 1 輯（1983 年）～第 14 輯（1992 年）
中國社會科學院民族研究所語言研究室（内部刊行物）

《民族史譯文集》第 1 輯（1977 年）～第 14 輯（1986 年）
中國社會科學院民族研究所（内部刊行物）

《國外藏學動態》第 1 輯（1986 年）～第 7 輯（1993 年）？
四川省民族研究所（内部刊行物）

《國外藏學研究譯文集》第 1 輯（1985 年）～第 20 輯（2014 年）
西藏人民出版社（継続刊行中）

4. 中国〈藏學〉の展開（2）

冷戦の終結を経て〈改革解放〉の 90 年代に入ると、イデオロギーの対立はいったん潜在化し、中国国内ではインフラの整備と市場経済への移行が加速した。チベット地域も観光事業の発展とともに立ち入り制限が少しずつ緩められ、現地での研修や研究ができるようになった。中国国内では観光事業の発展のなかで〈我國少数民族文化〉を紹介することを目的に、中国人の手になる研究調査がさかんに行なわれるようになる。

《西藏研究》1981 年～ 西藏自治区社會科學院（継続刊行中）

¹ 定期刊行部物ではないが、中国において国外のチベット学を参照するレファレンスブックとしてよく利用された著作がある。この時期の一連の動向のなかに位置づけられるだろう。

馮 蒸 《國外西藏研究概況：1949-1978》中國社會科學出版社，1979 年。

またこの流れを汲むものとして、近年もフランスのチベット学の成果を紹介する翻訳論集が刊行された。

鄭炳林（主編）耿昇（譯）《法國藏學精粹》（共 4 冊）甘肅人民出版社，2011 年。

この論集は《法國漢學研究叢書》の一部として刊行されていることが注目される。

Bod ljongs zhib 'jug 1982年～ 西藏自治区社会科学院（継続刊行中）

《中国藏学》1988年～ 中国藏学研究中心（継続刊行中）

China Tibetology 2003年～ 中国藏学研究中心（継続刊行中）

《中国西藏》1989年～ 民族出版社（継続刊行中）

《西藏研究》は中国におけるチベット研究の総合雑誌であり創刊も古い。中国語で書かれた国内向けの研究雑誌なので、さまざまなチベット文化に関する紹介程度の記事も少なくない。かつて私は共著で『活きている文化遺産デルゲパルカン』（明石書店、2003年）を執筆するにあたり、《西藏研究》に収録されているチベット大蔵経に関連する論文すべてに目を通したが、学術的なレベルに達している優れた論考は数篇に過ぎなかった。いちおう学術雑誌ではあるものの、一般向けの総合誌という性格をもっているせいであろう。この雑誌は早くからチベット語版（収録する記事は必ずしも漢語版とは一致しない）も刊行されている。

〈中国藏学研究中心〉（組織は1986年成立）が90年代初頭になって現在の建物が完成するとともに組織を再編し、研究活動を活発化するにあたり、その成果を公表する学術雑誌として創刊されたのが《中国藏学》である。2003年からは英語版の *China Tibetology* も創刊された。この英語版は、世界のチベット学への参加というよりは、中国における英語教育同様、中国のチベット研究の成果を発信するという姿勢が顕著である。これらに対して《中国西藏》は、観光市場も視野に入れた総合誌であり、一般向けの商業雑誌であるだけに購読者数が多く、影響の及ぶ範囲も幅が広い。

90年代以降になると、中国においても我が国の第三世代に相当する研究者が活躍を始める。〈藏学〉を含む中国の民族研究においては〈本民族的文化研究〉が重視され、自らの民族文化を研究する若手の少数民族出身の研究者が研究を展開し始めた。また国外に留学して学位を取得することも行なわれるようになった。この潮流のなかでチベット人自身による研究も広がりを持ち始める。〈藏学〉においてはもともと仏教哲学を中心とした学問の伝統があり、それが近代的な学術研究の基礎となったことに加え、都市部では中国語による高等教育の機会が拡大したこと、そして研究成果をチベット語と中国語で発表できる機会が増えたことなどをその背景として指摘できる。総じて国際性よりも国内志向が充実し、〈藏学〉は〈国学〉の重要な一分野としての地歩を固め始めた²。

² ワークショップの席上、大川謙作氏より中国の一部の研究者の間で漢学と周辺地域の言語文化研究を総合した〈大国学〉という概念が提唱されていることについての指摘があった。これ

以上を総括するものとして〈中國藏學〉の位置づけを詳述した総合的な著作が2013年に出版された。〈中國藏學〉という学問分野の形成についての公式な表明として、参照されていくことになるだろう。

王 堯 王啓龍 鄧小詠 《中國藏學史》(1949年前) 修訂版. 中國社會科學出版社, 2013年.

王啓龍 鄧小詠 《中國藏學史》(1950-2005) 中國社會科學出版社, 2013年.

5. チベット学の第三世代と中国の社会背景

日本においてチベット学の第三世代がおかれた社会と研究の状況について述べておきたい。私自身がこの第三世代に属することは、私がついて学ぶ機会に恵まれた師の系譜を見れば、一目瞭然であろう。

【第一世代】

* 李 方桂

* 趙 元任

* 多田等観

* 于 道泉

【第二世代】

大島 正二 (中国語音韻史)

橋本萬太郎 (中国語方言史)

北村 甫 (現代チベット語)

胡 坦 (現代チベット語)

また私が中文に籍を置きながらもチベット学へ傾倒した背景には、中国語とチベット=ビルマ諸語の交流史に興味があったことがある。古代中国語とチベット=ビルマ諸語との系統論と同源語の対応を論じるには、中国語の音韻史と上古音の再構にかかわる方法論の理解が不可欠である。唐代には敦煌で漢籍や仏典の漢字音がチベット文字で記録された。元代にはパスパ文字資料が当時の音韻を知る手がかりになる。清朝になると当時の西南中国のチベット語方言とチベット系の言語を記録した《西番譯語》という一連の資料が作成されている。

こうした研究分野にアプローチするには、研究の基礎としてまず中国語音韻史を学ん

は2005年に中国人民大学に〈國學院〉という研究機関が設置されるにあたり提唱された新しい概念で、中国の学術一般に浸透した普遍的な用語として定着しているわけではない。ワークショップのあとの懇親会にて浙江大学の何歡歡教授より、この概念がもともと季羨林(1911-2009)教授の提唱になるものであるとの御教示をいただいた。狭義の〈國學〉が、儒学を中心とした〈漢學〉に限定されるのに対し、中国国内の地域文化と少数民族文化、西洋の学者が〈漢學〉に対置する〈藏學〉〈滿學〉〈蒙古學〉〈伊斯蘭學〉などを包括するものとしてこの概念が提唱され、継承されているのだという。

でおく必要があった。加えて研究を志すにあたり、理解ある師から贈られたことばも大きく作用した。

* 「中国を知るには周辺の文化圏についてよく知らなくてはならない」

西遊記の研究者として著名な中野美代子北海道大学教授からのアドバイスである。『砂漠に埋もれた文字—パスパ文字のはなし』（塙新書 1971／ちくま学芸文庫 1994）という著作のある中野教授は、パスパ文字の研究者としても知られている。

* 「中国語を武器に未記述言語の研究に取り組むといい」

『言語学 私のラブストーリー』（三省堂 2002）といったエッセイの名手であり『言語学大辞典』（1988-2001）の編者でもある東京外国語大学の千野栄一教授からのアドバイスである。（私は学生時代に勝手に言語学の師と仰いで研究室に出入りしていた。）

われわれがついて学んだ第二世代の研究者は、ちょうど中華人民共和国の建国から文化大革命に突入する時期に学究生活を送ったこともあり、中国に行くこともままならず、ましてや動乱後のチベットに行くことなど全く考えられなかった。生涯現地を踏むことがないだろうという覚悟のもとに研究を行っていた人も少なくない。80年代に入り、中国の門戸が開放され、現地を訪れることが可能になると、われわれ第三世代は意気込んで争うように現地を踏んだ³。チベット文化圏への留学や長期滞在もできるようになり、チベット学を学ぶために中国留学するという選択肢は常態となった。やがて中国語を媒介言語として調査を行ない、中国語で研究発表や論文執筆を行なうことが、第四世代以降は一般化して現在に至っている。

6. 日本人研究者が貢献できること

しかし中国の〈國學〉研究に日本人学者が参入し、同じ土俵で対等に研究を展開するのは容易ではない。生涯をかけた相当な修行が必要である。これは決して誇張ではなく、中国研究者のひとりとして日本最大の中国学の研究機関に身をおいての実感である。では日本のチベット研究者が〈中國藏學〉の土俵に乗らずに、世界レベルのチベット研究への貢献ができるとしたら、どのような方向性が考えられるだろうか。チベット研究に

³ 80年代の中国にはまだ〈對外開放都市〉と〈未開放都市〉との区別があった。たとえ〈開放都市〉であっても、私が1988年に方言調査に訪れた青海省の海南藏族自治州のある県では、滞在していた招待所から外出すると公安警察の尾行がつき、方言調査は開始3日目で圧力がかかり妨害された。やがて警察に呼び出され、手続きの申請書類が不備だとの理由で強制退去をさせられたという経験がある。現在アムドでは比較的現地研究がしやすいと聞くにつけ、隔世の感を禁じ得ない。上述の経験がトラウマとなって私はアムドを離れフィールドをカムに移した。その後は現在までアムドを再訪する機会を得ていない。今世紀に入り海老原志穂さんが、かつて私が強制的に退去させられ、研究を断念せざるを得なかったアムド語の研究に闊達に取り組んでいる姿には感慨深いものがある。

における日本人研究者の利点を整理することで、より高いレベルでの人文学への普遍的な貢献の可能性も見えてくるのではないか。

日本人研究者がチベット研究に参加するうえでの利点は、以下のようにまとめられるだろう。

* 漢文資料が読める。資料の入手が容易である。(これは欧米の研究者に比して優位であり、中国の研究者と対等に立てる。)

* 現地へのアクセスが容易である。(欧米からのアプローチに比して地の利がある。)

* 中国国内でも、また中国国外のチベット文化圏でもフィールド調査ができる。

* 欧文の資料、とくに中国では入手しにくい政治的立場の資料も容易に見られる。

* (あたりまえだが) 日本語による研究成果が容易に参照できる。

中国でも欧米でも日本語による研究成果を自由に利用できる研究者は決して多くない。逆に日本の若手研究者のなかには中国に留学し、現代中国語を習得したものが少なくない。これは今後の強みになるであろう。

【言語研究における貢献】

とくに私が専門とするチベット＝ビルマ諸語を対象とした言語学の分野では、日本の研究者には、以下のような有利な点がある。

* 若い世代は中国語を媒介言語として通訳を介さずにフィールドワークができる。

* 一般言語学的な視点からの客観的検証ができる。

中国における言語研究は、伝統的な中国式の記述の方法論を利用しているものが多い。類型論的記述を行なうに際しては、一般言語学のさまざまな視点からのアプローチにより新たな知見が得られる可能性がある。同様に、日本語話者の観察が、調査者の母語や媒介言語（とくに中国語）からの干渉による記述の不備を補える場合も少なくない。中国の研究者は中国文法の枠組を応用して言語記述を行ないがち傾向があることに加え、記述と分析に母語（あるいは媒介言語の中国語）からの干渉がしばしば見られるからである。

たとえば、チベット＝ビルマ諸語においては自動詞と他動詞の形態的な区別があるが、自動詞と他動詞が形態的に区別されない中国語を媒介とした調査分析では、自他対応の分析に厳密性に欠ける記述がよく見られる。同様に、中国の研究ではチベット＝ビルマ系の言語に見られる音調を何でもかんでも「声調」として扱う分析がほとんどだが、周知のようにラサ方言は声調とアクセントの複合システムであり、羌語支のムニャ語は声調ではなくピッチアクセントシステムであることを日本の研究者が明らかにしている。これらの分析結果が世界の研究者の間で常識的な知見として共有されているとはいいがたいのは、残念なことである。

中国語や英語からの大量の借用語を有し、漢語に異なる読音を使い分けている日本語

の話者は借用語の語彙の層別についても敏感であり、正確な分析と観察が期待できる。たとえば、チベット語のセンゲ（獅子）は、中国語〈狻猊〉の借用に由来する可能性がある。現代中国語では *suānní* でチベット語の *sengge* とは音が合わないが、〈狻猊〉の字は古く《説文解字》（西暦 100 年）に見え、まさしく獅子のことで、古くは〈狻猊〉とも書いた。二音節目の〈猊〉また〈麤〉を漢音でゲイと読むのは概ね唐代音に由来し、*/ngei/ に近い音を写している。ゆえにチベット語の *sengge* が借用語であるとしたら、それは吐蕃時代に借用された漢語由来の語である可能性が高い。

中国語では外来語や借用語の層別は認識しにくいいため、中国語による言語の記述分析においても十分な注意が払われていないことがある。このほかにも、チベット系の諸語にも見られる存在動詞の生物性の弁別や、日本語と構造が酷似する格助詞の用法と文法関係の把握においては、日本語の母語話者が観察に有利であることは言を俟たないが、同時に日本語と対照する「チベット語学」の枠を越えて、さらに大きな「チベット＝ビルマ諸語」あるいは「シナ＝チベット語」といった巨視的なレベルで、隣接する周辺諸語や周辺文化との歴史的関係をも視野に入れた幅広い考察を深めていく必要があるだろう。

【研究成果の発信における利点】

また研究成果の発信においても日本の研究者が有利な点がある。チベット語によるコミュニケーションと日本語での研究発表はもちろん、近年では日本の研究者のスキルとして、英語と中国語による情報発信に柔軟に対応できるようになってきた。さらに日本で研究を進めることは、その立ち位置としても、研究成果の発信にあたり少なからぬ利点がある。個人のおかれた環境や信条の違いがあるため、政治的な中立を維持するのは難しいとしても、日本のチベット学においては研究者の背景や環境に関わらず互いの研究を尊重する土壌が形成されており、イデオロギーにとらわれない議論と意見の表明ができる。そのうえで「不偏」な研究の展開と国際シンポジウム等の開催が可能であることは、日本のチベット学の置かれた環境として特筆すべき利点であろう。

7. おわりに

私は中文で中国語音韻史と方言記述の手法を学んだ。現在は中国語を媒介言語として言語調査を行ない、中国語で研究発表や論文執筆を行なっている。チベット学と西夏学の研究者でもあり、言語学の研究者でもあるが、現実に対応して貢献が可能な研究の方向を模索するうちに中国学の辺境に落ち着いた感が強い。中国国内のチベット語方言やチベット系諸語の現地調査には、中国語でインタビューをせざるを得ないという実情が

あり、研究成果を中国語で発表するのは、チベット＝ビルマ語派の [とくに羌語支の] 言語研究者の多数に研究成果を参照して欲しいからに他ならない。この分野の研究は日本語で発表してもほとんど参照されないし、英語では中国の研究者が参照しにくく、また中国国内の出版においては、英語論文は発表の場が限られてしまうという問題もあるからである。

私のような立場は、見ようによっては、チベット学が中国学に呑み込められ行く情勢に積極的に加担しているように見えるかも知れない。中国学の研究者でもある私は、それを否定はしない。しかしチベット語で現地調査を行ない、チベット語で研究発表を行なうことができない社会的な現実と個人的な言語能力の限界がある以上、チベットに学び続けていくためには、現実主義の路線を取らざるを得ない。何より中国に生まれたチベット人は中国社会のなかで中国人として生きざるを得ない。それが現実である。(誤解のないように付け加えれば、「中国人として生きる」ことが直ちに「漢族に同化する」ことを意味するわけではない。) 勝手なことを言えるのは当事者ではないからである。そして現実主義という点では、中国国内の少数民族の友人たちのしたたかさに学ぶべきことがずいぶん多いように思う。

第一次資料を丁寧に分析し、チベットの思想や文化を翻訳して理解するという日本の学問が得意とするいわば輸入紹介型の研究を基礎として、外国語のロジックに依らず母語である日本語を駆使して考究と討論を深め、新しく深い見識を獲得してきたのが日本のチベット学の伝統であり特色だと言えるだろう。ただ研究成果の一部については英語や中国語の論理にアダプトして発表せざるを得ないのは時代の趨勢でもあり、世界のチベット学と交流するには現実主義を取らざるを得ない場合も少なくない。そのいっぽうでしかし、日本では世代を越えて優れた調査報告や論考が生産され続けており、近年は各国からの留学生の増加もあって、チベット学における日本の研究成果を無視できないから、日本語を学んでさらに日本のチベット学に学ぼうという気運が生まれつつあることを喜ばしく感じてもある。

(2015年12月8日修訂稿)